

『宗祇終焉記』 小考

崔 忠 熙

「宗祇終焉記」は、宗祇の弟子宗長が文龜元年（1502）六月下旬に駿河の草庵を出て、同年の九月一日頃越後の国府に滞在中の師匠の宗祇を訪ね、文龜二年（1502）四月に宗祇とともに旅に発って信濃・上野・武蔵を経由し、七月三十日の夜半過ぎに箱根湯本で宗祇の臨終をみとり、師の遺骸を駿河桃園の定輪寺に葬り、駿河の宗長の草庵に帰着するまでの経過を記した文章である。

「宗祇終焉記」は、宗祇自身の手によって書かれた記録ではないが、宗祇の最晩年の伝記資料として重要であり、また、宗祇の終焉の際の写実的な描写などは、優れた文学性を備えている。

しかし、これまでの研究では、宗祇研究の補助的手段として使われた傾向があり、宗長研究でもあまり中心材料として扱われることがなかった。金子金治郎氏が「宗祇旅の記私注」<sup>1)</sup>の中で群書類従本を底本に内閣文庫本で対校した『宗祇終焉記』を翻刻し、略注釈を付けて紹介されたが、この作品の持つ価値について完全に説明されたとは言い切れない。

本稿では、この作品の中に投影された宗祇像を明らかにすることによって、宗祇最晩年の様子を探ってみると共に、宗長の創作意図およびこの作品の持つ文学的価値を説明してみる。

二

まず、宗祇の越後下向と宗長の宗祇訪問を記録した冒頭の文を見

ると、

宗祇老人、年ごろの草庵も物うきにや、都の外のあらましせし年の、春のはじめの発句に、

身や今年都を余所のはるがすみ

その秋の暮、こし路の空におもむき、此のたび（は）帰る山の名をだに思はずして、越後の国にしろたよりをもとめて二とせ計送られぬと聞きて、文龜のはじめの年の六月の末、駿河の国より一步をすゝめ、足柄山をこえ、富士のねをよそに見て、伊豆の海、おきの小島による浪、こゆるぎの磯をつたひ、鎌倉を一見せしに、右大将家のそのかみ、また九代の栄も、ただ目の前の心ちして、鶴が岡のなぎさの松、雪の下のいらかは、げに岩清水にもたちまさるらんとぞ覚え侍る。山くくのたゝすまひ、やつくし（く）まぐいはず筆のうみも底に見えつべし。爰には（八）九年が（の）このかた、山の内、扇の谷、鉢権の事出で来て、凡八ヶ国二かたにわかれて、道行く人もたやすからずとは聞こえしかど、こなたかなた知るつてありて、武蔵野をも分け過ぎて上野をへて、なが月朔日頃に、越後の国府に至りぬ。

とある。宗祇の越後下向の理由を「年ごろの草庵も物うき」ものであったので都の外に去ろうと思立ったと記している。この越後下向は、宗祇にとって七回目の越後への旅である<sup>2)</sup>ということを考えてみると、日ごろの草庵生活の退屈さを逃れるためにこの旅に出たとは思えない。当時の連歌師たちは、地方の政治的庇護を受けながら、都の文化を伝える一方、地方の好士たちに古典を講じたり、連歌会を開いたりして、頭門権家と交渉していたことを考えると、宗

祇のこの越後下向の契機も、旅の詩人としての歌枕探訪や自然観照などのためではなく、地方勢力との関わりにあったと思う。この作品の成立事情①から見ると、宗祇没直後に追悼の意を込めて折々の書き留めをもとにして、師の終焉前後の事情をまとめ、他の門弟に先立って帰京する水本与五郎に託して、京都の知人たちへ報告するための文章であることがわかる。宗長は、今はなき師の越後下向の目的を「年ごろの草庵も物うきにや」と書くことによって、旅の詩人としての純粋な目的を浮かび上がらせようとしたのである。この作品の文芸作品としての価値はこういう記述にあると言える。作中人物である宗祇が語り手の立場で「年ごろの草庵も物うきにや」と語っていると書くことによって、宗長の記録に意味が生まれてくる。ただの旅の記録を残した日誌的な記録でなく、文芸作品と言える所以はここにある。

さらに、「此のたび（は）帰る山の名をだに思はずして」という箇所は、この作品の文芸作品としての価値をより明らかにしてくれる。宗祇の発句「身や今年都を余所のはるがすみ」は、今年自分は春霞の立つ春をよそにして外へ去ろうとしているという意味で、都を去る計画を詠んではいるが、「帰る山の名をだに思はず」とは言っていないのである。これを宗長は「帰る山の名をだに思はずして」と脚色することによって、死を覚悟して旅に立つわびしい旅の詩人としての宗祇像を表現しようとしたのである。

また、発句の次の「その秋の暮、こし路の空におもむき」の部分もこの作品の文芸性を現している。金子金治郎氏は注釈で、後法興院記の七月十三日条の「宗祇来。々十六日下向越後云々」を引用して、これを明応九年（1500）のことであると述べている。すると、

宗祇の「身や今年」の発句が、実隆公記明応八年（1500）正月六日の条に「宗祇今年発句」として載っているから、年次が合わない。発句を詠んだ年（明応八年）には旅に立たず、その翌年（明応九年）に越後に下向したというのが事実であるが、これを宗長の思い違いで同じ年と記録したと金子氏は注を付けている②。果して、これが宗長の思い違いであろうか。宗長が越後の宗祇を訪ねたのは、上に引用した本文通り「文龜はじめの年六月末」であり、宗祇が越後に下向したのは、そのちょうど一年前の明応九年七月のことである。わずか一・二年前のことを五五歳の宗長が錯覚するはずがない。宗長は、師の宗祇の一生を旅の詩人として削り上げるために事実を知っていないが、わざとこのように書いたのではないだろうか。

この作品の中で宗長は、宗祇臨終の様子を次のように記している。おの／＼ころをのどめて、あすは此の山をこゆべき用意せさせて、うちやすみしに、夜中過るほど、いたくくるしげなれば、をしうごかし侍れば、只今の夢に定家卿にあひたてまつりしといひて、玉のをよ絶えなばたえねといふ哥を吟せられしを、聞く人、是は式子内親王の御哥にこそと思へるに、又このたびの千句の中にありし前句にや、

ながむる月にたちぞうかる、  
といふ句を沈吟して、我は付けがたし、みな／＼付け侍れなどたはぶれにいひつゝ、ともし火のきゆるやうにしていきも絶えぬ。

ここでは、臨終直前の夢の中で定家に会ったと言って、「玉のをよ絶えなば絶えね」と式子内親王の和歌を吟じたあと、「ながむる月にたちぞわかるゝ」という前句を沈吟しながら「我は付けがたし、

みなみな付け侍れ」などと言って、「ともし火のきゆるやうにしていきも絶え」たと記している。

連歌の特徴である付け句のことに最後の最後まで心を遣っている宗祇の連歌師としてのプロ精神や、ともし火のように旅先でわびしい臨終を迎えた旅の詩人の姿を浮き彫りにすることによって、この作品の文芸性はより高くなって行くのである。

さらに、中国の遊子の道祖神になった由来や人生を旅の世にたえた慈鎮和尚の「旅の世に」の歌によって、旅の詩人としての宗祇像は、より鮮明に浮かび上がってくる。こういう旅の詩人としての宗祇像を作りあげるためには、旅に立つ必然的な動機が必要である。即ち、冒頭文の「年ごろの草庵も物うき」ことだったので旅に立ち、このたびは「帰る山の名をだに思はず」に死を旅路で迎えようと覚悟する宗祇像が生きてくるわけである。こういう首尾一貫した宗祇像を描くことによって、ただの臨終事実を知らせるために記録した記録文でなく、旅の詩人のわびしい終焉の姿を描いた文芸作品という性格が強められているのである。

### 三

宗長が宗祇の終焉についてはかなり質の高い文芸性あふれる文章を書いていることを指摘したが、他の記述は果たしてどんな様相を見せているのであろうか、分析してみることしよう。

一般的な紀行文学の場合は、旅路の出来事、見聞、感想などを記録するものが多い。しかし、この作品では他の紀行文学に比べて、あまり細かく記述されていない場合が多い。先に引用した冒頭文の中から、宗長が駿河を発って越後の国府に至るまでの記述をみると、

ほんとうに無味乾燥の文章である。宗祇の紀行文学である「白河紀行」「筑紫道記」などに比べると雲泥の差である。六月末に駿河を発って霜月朔日に着くまでの二ヶ月以上の記録が、ただの八行程で終わっている。「足柄山」「富士のね」「こゆるぎの磯」「鶴が丘」「武蔵野」など、いろんな歌の名所を通りながら歌一首も引用していない。どんな目的をもって旅に立つにしても、旅での感想をしみじみと書き記すのが旅の記録の一般的類型であるところから見ると、いささか変わったところのある作品である。駿河から越後まで二ヶ月以上かかっているのを見ると、さほど急いでいたのでもないし、後の本文の中で宗長自身の病気のために旅程がずれたことを述べているが、その都度そういう事情がこと細かに書かれているのを見ると、原因は病気だけでもないらしい。

これに比べて、地方の政治的状况などは、非常に詳しく書き記しているが目立つ。鎌倉を見た感想を「右大将家のそのかみ、また九代の栄も、ただ目の前の心ちして、鶴が岡のなぎさの松、雪の下のいらかは、げに岩清水にもたちまざるらんとぞ覚え侍る。山くづまひ、やつくし(く)ま(く)いはゞ筆のうみも底に見えつべし。爰には(八)九年が(の)このかた、山の内、扇の谷、鉾の事出で来て、凡八ヶ国二かたにわかれて、道行く人もたやすからずとは聞こえしかど、こなたかなた知るつてありて」云々と細かく記録している。ここには、文学の好士としての宗長像は見当たらない。宗祇の場合も「白河紀行」や「筑紫道記」などで地方の政治的なことに関して記述することがあるが、やはり主流をなしているのは、歌枕や名所探訪などに関する記述である。宗長も宗祇の後を継いで連歌師の道を歩んでいるが、宗祇よりもっと政治的な庇護

を受けていたことから推測してみると、ただの文人としてよりは、連歌師としての職業意識の方が勝っていたように読み取れる。宗長の生涯の中で駿河に庵を結んで過ごした歳月の長かったことからも、地方の権力者の庇護の下で優雅な生活をしていたことがわかる。即ち、政治的勢力と密着している宗長の一面をうかがうことができる。政治的関心への長い記述に比べて、この旅の目的であった宗祇を訪問した後の記述は極めて短かい。「宗祇げさんに入りて、年月へだたりぬる事などを打かたらひ、都へのあらましし侍るおりしも、ひなの長路のつもりにや、身にわづらふ事ありて日数になりぬ。」とあって、宗祇と出会って、具体的に何を話し合ったのかについて全然触れていない。どんな事情があったのか分からないが、かなり急いで都へ戻ろうとしたのであろう。

長期間越後にいる予定はなかったが、宗長は病気のためにしかたなく越後に残った。病気が治って、また旅立とうとしたのが神無月二十日あまりであるから、五十余日間越後にいて、その中の相当の期間を病気で寝ていたことになる。宗長がどんな病気で悩まされたかははっきりしないが、この作品の中で、宗長自身の病気のために旅程が狂った記述は、別の条にある。

此の暮より、又わづらふ事さへかへりて、風さへくは、り日数は打ち置きぬ。  
へぬ。きさらぎの末つかた、をこりたりぬれど、都のあらまし

これから、宗長の病気のためやむをえず帰京が延期になり、結局越後で年を越え、翌年の正月の九日の連歌会に参加した夕方から、また発病して「きさらぎの末つかた」まで、ほぼ二か月間寝ていたことがわかる。

ここで疑問に思われるのは、かような病弱な宗長が無理してまでなぜ越後に宗祇を訪ねて行ったかであるが、はっきりしたことはわからない。

この作品の中で五五歳の宗長の病弱さに比べると、八二歳の宗祇は、老軀としてはかなり元気であった。宗祇の元気な活躍振りを見せてくれる所を拾ってみよう。

元日には宗祇夢想の発句にて連歌あり  
年やけさあけのいがきの一夜松

おなじき九日に、旅宿にして一折つかうまつりし発句に、  
青柳も年にまさ木のかつら哉

文月のはじめには武蔵の国入間川のわたり、上戸といふ所は、いま山の内の障所なり。ここに廿日あまりほどやすらふ事ありて、数寄の人おほく、千句の連歌なども侍りし。

鎌倉近き処にして廿四日より千句の連歌あり。廿六日にははてぬ。一座に十句十二句など、句数も此ごろよりはあり。

文龜二年元日に、夢想発句で連歌会に参加し、同月九日の連歌会で発句を詠んでいる。わずか九日の間に二回も連歌会に参加するほど元気であった。臨終する七月上旬には、武蔵の上戸で千句連歌会に出座し、臨終六日前に当る七月二十四日から四日前の二十六日にかけて、鎌倉近くの相模守護代上田の館の千句連歌に出座して、百句一巻の中で平均十句または十二句程度を詠んでいるから、結局百句以上の句を詠んでいたことがわかる。もちろん、宗祇も病気をしな

かつたわけではない。宗長と宗祇が越後を立って一緒に旅に出て草津に到着した後、二人は別れて宗長は草津に、宗祇は近くの伊香保温泉に泊った。

おなじ国に、伊香保といふ名所の湯あり。中風のためによしなど聞きて、宗祇はそなたに赴き、二かたになりぬ。此の湯にてわづらひそめて、湯におるゝ事もなくて、五月のみじか夜をしもあかしわびぬるにや。

わざわざ宗長と別れて中風にいいという伊香保温泉に行ったことから、宗祇の病気が中風であったことが推測できる。しかし、本当に中風をわずらっていたのなら、越後から伊香保まで同行できるはずがない。中風気味はあったにしても、中風とは言えないのかもしれない。「此の湯にてわづらひそめて」とあるところから推測すると、本当に病気がかかったのは、伊香保温泉に着いてからだと言える。その後は病気のために湯に入る事もできず、夜も病気のためによく寝られなかったことがわかる。しかし、この後また武蔵、鎌倉への旅へ同行し、二回も千句連歌会に参加しているのを見ると、老軀としてはかなり元気であったことが推測できる。この一年間で、何回も病気で寝込んだ宗長に比べると、宗祇の方がかえって元気であったと言える。

病弱な宗長にとって、予定になかった老軀の宗祇との同行の旅は、かなり負担であったはずである。

きさらぎの末つかた、をこたりぬれど、都のあらまは打ち置きぬ。上野の国草津と云ふ湯に入りて、駿河の国に罷帰らんのかぎり、おもひ立ちぬるといへば、宗祇老人、我も此の国にしてかぎりを待ち侍れど、命だにあやにくにつれなければ、こゝら

の人々のあはれびも、さのみはいとはづかしく、又都に帰りのほらんも物うし。美濃国にしろべありて、のころよはひのかげかくし所にもと、たびたびふりはへたる文あり。哀ともなひ侍れかし、富士をも今ひとたび見侍らんなどありしかば、うちすて国に帰らんも、つみえがましくいなびがたくて信濃路にかゝり、ちくま河の石ふみわたり、菅のあら野をしのぎて、廿六日といふに、草津といふ所につきぬ。

この記述から、何かの事情で越後に居づらくなった宗祇が、越後での永住をあきらめて、宗長と同行したいと言っていたことがわかる。これに対して宗長は、自分の気持を「うちすて国に帰らんも、つみえがましくいなびがたくて」と率直に記録している。自分一人の身さえ病弱で困り果てているのに、老軀の宗祇をお供しての旅行はさらに困るはずである。しかし、自分の師である宗祇の願いを拒絶することすら罪を作るようでは済まなかった。「うちすて」という表現の中に宗長の率直な気持ちが見られる。自分の感情を隠さずに正直に表現している宗長の一面を伺うことができる。宗祇の無理な願いを断ることができなくて、仕方なく発った旅であるが、この旅の途中、師の臨終を見守ることができたのは、宗長にとっては不幸中の幸いであったはずである。弟子として師の最後を見守ることができたこと、旅路で臨終を迎える師の姿とは、宗祇と同じく連歌師の道を歩むことを目指していた宗長にとって、一つの理想の姿であつたらう。

この作品の圧巻と言える宗祇臨終の場面をもう一度引用しよう。国府津といふ処に旅宿をもとめて、一夜をあかし侍りしに、駿河よりむかへの馬、人、輿なども見えて、素順馬をはせて来り

むかはれしかば、力をえて、明れば箱根山の麓、湯本といふ所につきしに、道のほどよりすこし心よげにて、ゆづげなどくひ、物語うちしてまどろまれぬ。

おのゝこゝろをのどめて、あすは此の山をこゆべき用意せさせ、うちやすみに、夜中過るほど、いたくるしげなれば、をしうごかし侍れば、只今の夢に定家卿にあひたてまつりしといひて、玉のをよ絶えなばたえねといふ哥を吟せられしを、聞く人、是は式子内親王の御哥にこそと思へるに、又このたびの千句の中にありし前句にや、

ながむる月にたちぞうかるゝ、

といふ句を沈吟して、我は付けがたし、みなゝ付け侍れなどたはぶれにいひつゝ、ともし火のきゆるやうにしていきも絶えぬ。

宗長は、臨終に近い宗祇の切れ切れに発せられた言動を実にうまく書き表している。「只今の夢に定家卿にあひたてまつり」という表現は、連歌の作品世界を和歌の全盛期である新古今時代のレベルにまで高めようと自ら努めた古典主義詩人としての宗祇像をよく現している。宗祇が新古今歌人の中で死ぬ直前の夢の中にまで見るほど傾倒していた人は定家であったことが分かる。安田章生氏は、「宗祇の臨終の様子は、宗祇を頂点とする連歌が、西行・定家とつながっていることを象徴的に示している。連歌という文学は、作者の生き方や作品の内容においては西行とかよい合うところが多く、その手法のうえにおいては定家に学ぶところが大きいのである。」と述べているが、まさにその通りである。

また、夢の中で定家に会ったという言葉に続けて「玉の緒よ」と

いう式子内親王の歌を吟じた事について、両角倉一氏は「門弟たちを不審がらせたけれども、宗祇の深層意識に定家と式子内親王とを結ぶ謡曲「定家」的な映像があったのかも知れず、また、式子の歌に託して臨終の覚悟を表出したようにも考えられる。」と述べているが、稿者は意見の後半に賛同したい。宗祇の意識の中には、前半のようなものがあつたかも知れないが、これは宗長の作品であるということを考えた場合、作者の宗長の意識の中で、どう理解していたかが重要であると思われる。宗長は、旅の詩人としての宗祇が、旅路で死ぬ覚悟を表出することによって、西行に継いで旅の詩人の系譜に入れ、宗長自身も将来はこういう道を歩みたいという覚悟を披瀝したかっただと思う。

また、「ながむる月にたちぞうかるゝ」という句を沈吟して、「我は付けがたし、みなゝ付け侍れ」など遺言めいたものを残して、ともし火のように息を引きとつたというあたりに、宗祇の連歌師としての姿が哀切極まりない程よく現れている。死ぬ瞬間まで、連歌の特徴である付け句を工夫している宗祇の姿がありありと鮮明に描かれている。また付け句のことを「たはぶれにいひつゝ」とあるところから、臨終の瞬間まで、死への不安は全然なかったことが分かる。

以上のように、臨終の瞬間まで、和歌と連歌を同じレベルで取り扱っている古典主義詩人としての宗祇像を書き上げることが、宗長の創作意図であったわけである。この作品がただの死の記録でなく、文芸作品として作家宗長の創作意図の下で書かれ、この臨終の瞬間に作品の絶頂をもたらしたかったのであろう。

臨終を迎えて、和歌の世界を夢見ながら、付け句のことを考え、と

もしびのように息を引き取るというドラマチックな虚構によって、この作品の文芸性が生きてくるのである。

#### 四

今まで、主に、地の文について作品分析を試みてきたが、今度はこの作品の中に引用されている発句、付句、和歌などの分析から、この作品を説明して行くことにする。この作品の中では、発句六句、前句三句、付句五句、和歌十二首（長歌一首含む）が引用されている。この作品の中に載る順に依って分析を試みることにする。

まず、一番最初に載るのは、宗祇の発句である。

身や今年都を余所のはるがすみ

この句は、明応八年正月四日詠んだ句で、今年自分は春霞の立つ都をよそにして旅に立とうとするという意味である。この発句から宗祇は、都を離れる計画をしていたことがわかる。一般的に正月初めごろに行われる連歌会の発句は、めでたい祝言性を詠んだ句が多いが、これは例外である。この句で早くも旅の詩人としての臨終に向っての序章が始まったわけである。

次は、宗祇を訪ねた後、病気のため出発の機会を逃して、仕方なく、越後で冬を過ごすことになった宗長が、例年になく大雪に会って詠んだ歌である。

思ひやれ年月なるゝ人だにもあはずとうれふ雪の宿りを

この地方に長く住みなれた人でさえ経験したことがないと心配するほどの雪が降り、その雪のために閉じ込められた宿のことを思いやって下さいという意味の歌である。詠者である宗長は、病弱で、一人ででもこんな寒い雪の中で過ごすことが大変であるのに、老軀

の師宗祇とともにこの雪の中で年を越すことは、耐えられないことなのであろう。この雪の中で年を越すのがどれほど大変だったかは、この歌の次に出てくる文章でよく分かる。「かくて、師走の十日、已刻ばかりに、地震おほきにして、まことに地をふりかへすにやとおほゆる事、日にいくたびといふかずをしらず、五日六日うちつきぬ。人民おほくうせ、家々ころびたふれにしかば、旅宿だにさだからぬに、又おもはぬ宿りをもとめつゝ年も暮れぬ。」とあるように、大雪にさらに地震が起り、それに旅宿さえも決まらないという極度の不安の中での越年であったから、この歌の内容が実感として伝わって来る。宗長は、この歌を詠む際に、自分たちの辛さを誰かに訴えることによって、自分たちにも言い聞かせているのである。人生をよく旅にたとえるが、こういう不安定な人生への旅を振り返ってみて、憂愁に沈んでいる宗長の姿が目に見えるように浮かんでくる歌である。

こういう厳しい現実の中で宗祇をかかえての旅に発ってみて、はじめて宗長は連歌師として歩むことを決心したのであろう。連歌師としての生活が、さだかならぬ旅宿のようなものであるにしても、黙々と受けとめる宗祇の態度を見て、感銘を受けたに違いない。

次は文龜二年元日の宗祇夢想の発句である。

年やけさあけのいがきの一夜松

この発句は、朱の忌垣をめぐらした北野神社の一夜にして生じた松原に、今朝こそ新しい年が開けてゆくという意味の句である。一夜松は、天慶九年(988)北野神の託宣があり、一夜に数千本の松を生じ、そこに社殿の造営が行われたという北野神社創建にかかわる説話から来ている表現である。

こういうめでたい発句が夢想の発句だったという所に注目したい。夢想の発句とは、夢の中で神や仏が示してくれた発句を指すのであるが、ここでは北野神社に祭つてある連歌の神から授かつた発句であるという意味にとれる。こういうめでたい連歌が、変わらない松のように永遠であることを祈つた発句である。この発句の中から、宗祇の文龜二年へ向けての意気込みを読み取ることができる。八二歳を迎えての元日に、こういうめでたい発句を詠んでいるのを見ると、宗祇の連歌への情熱を充分理解することができる。

この連歌会が終わつたあと、宗長は宗祇の長寿を祈つて、次のような歌を詠んでいる。

此の春を八十にそへて十とせてふみちのためしや又も始めん  
これは、宗祇の年齢が八十歳にさらに十歳を加えて、これからますます榮えて行くように、そういうめでたい先例をこの春とともに始めてほしいという意味の句である。宗長は、この歌の中で宗祇の長寿を祈るとともに、「みちのためしや」と、連歌の道がますます榮えて行くように願っている。表面的には、宗祇の長寿を歌いながら、内容的には、「年やけさあけのいがきの一夜松」の発句と同じ趣旨の歌であると言える。

宗長の歌に宗祇は次の返歌を送る。

古のためしに遠き八十だに過ぐるはつらき老いのうらみを

この歌は、昔にはなかなか例のない八十歳を過ぎるのさえ老年の後悔のみ感じられて辛いという意味である。八二歳にもなる宗祇にとって、もっと長寿してほしいというのは辛さだけを増してくれるのであった。この歌には、宗祇の老いのわびしさがよく現れている。

この歌の次に、正月九日の連歌会での宗祇の発句が載っている。

青柳も年にまさ木のかつら哉

この句は、春の青柳もまさ木のかつらのようになかなかめでたいと詠んだ句である。「まさ木のかつら」は上代の神事に鬘として髪に飾つたもので、めでたいものを象徴するものである。青柳の長いイメージと、「まさ木のかつら」のイメージがよく調和している句で、連歌の世界がそのめでたさをいつまでも長く続くことを祝っている句である。前の「年やけさ」の句とともに、連歌の永遠の発展を祈つた句であると言える。

次は、いよいよ越後を立て、美濃の知人のもとを目指す途中、中風によいという伊香保温泉に寄つたが、ここで発病して入湯もできなまま、五月のみじかい夜をあかして詠んだ歌をみてみよう。

いかにせむ夕告鳥のしだりをに声恨むよの老のねざめを

五月の短夜は、鶏が早くも夜明けを告げて鳴くの恨むのが恋の習わしであるが、その短い夜に目をさましては明かしかねているこの老の怪しさをどうしようという意味の歌である。せっかく訪れてきたこの温泉に、つかれることもできない程の病気で、なかなか寝つかずに目が覚めて夜が明けのを待ちわびている宗祇の姿がありありと描かれている歌である。この老病の辛さは、この後の宗祇が臨終直前に口の中で吟じていた式子内親王の歌「玉のをよ絶えなばたえね」と合わせてみると、老のわびしきの絶頂と言えよう。旅路で発病して、がまん出来ない程の痛さで寝つかず、かえって死んでしまった方がましだと思つている宗祇の心境をよく表している歌である。この後、病弱の宗祇は、また旅を再開し、武蔵の河越、江戸館を経て、鎌倉では千句連歌に参加している。この千句の中から、宗長は自分の印象に残つた付句を前句とともに二句取り上げている。

けふのみと住む世こそ遠けれ

八十までいつかたのみし暮ならむ

年のわたりはゆく人もなし

老のなみいくかへりせばはてならむ

まず、最初の付け合から見ると、前句は「住むのも今日かぎりだと思つて生きてきた日々が、もう遠い過去のことになった」という意味で、付句は、「八十歳まで生きようと期待したことがあったらどうか。そのような人生の暮れに期待をかけたことがない」という意味である。前句では無常を詠んでいるが、付句では、八十歳まで生き延びたいと期待もしていないのに、いつの間にか甲斐もなく年をとってしまった自分を振り返ってみて嘆いている、と詠むことによつて、より一層無常感が増しているのである。痛々しい程よく無常感を現したこの句が宗長の印象に残るのは、当然であるように思われる。

二番目の付け合を見ると、前句は「旧年から新年へ越える年の渡りだが、自分のほかに越える人もない。」という意味で、宗祇の付句は、「ともに年を越える人もいない老軀の私は、これから先、どれほど年を重ねれば、人生の果てに達するであろうか」という意味である。前句では年末の一人暮しの寂しさを詠んでいるが、付句では年末を一人で暮らす人を、高齢になって一人だけ生き残っている人として付けることによつて、老いの寂しさを嘆いている老人、即ち宗祇自身の立場として付けている。最初の付け合とともに、無常と老いの侘しさを強調した付句である。

上の二つの付句を「思へば、いまはのとちめの句にもやと今こそ

思ひあはせ侍れ。」と言うところから、実際、これらの句が詠まれた時には、宗長もこれが最後の付句になるとは思っていないことがわかる。宗祇がなくなった後、振り返ってみたら、すでにこれらの付句を通して宗祇は死を覚悟していたことがわかったというわけで、この作品を記述する段階での宗長の非哀感を読み取ることができる。

そのあと宗祇は、国府津を經由して箱根の湯本で臨終を迎えるのであるが、死の瞬間に前句を吟じながら付句のことを悩みつともしびのように息を絶ったという前句をみよう。

ながむる月にたちぞうかる、

この句は、月を眺め、月にあこがれて心も月に浮かれてしまったという意味である。宗祇が、この句に付け句が出来なかつた理由は何であろうか。この前句がその時の自身の心境をあまりにもよく現していたから、これ以上付け句をする必要がなくなつたのではなからうか。この「月」は、ただの月でなく、風雅の心を誘い出す代表的素材としての「月」である。この風雅の世界に浮かれて、生涯を連歌のために暮らし、とうとう風雅を捜し求めた旅路での臨終を迎えて、この前句のことを思い出している宗祇の姿を想像することができる。まさに、風雅の心に誘われた旅の詩人が臨終を迎えてから吟じるのにふさわしい句である。

宗祇がなくなった後、彼の旅の生涯を振り返ってみて、宗長は慈鎮和尚の次の歌を上げています。

旅の世にまた旅ねして草枕夢のうちにぞ夢を見る哉

この歌は、千載和歌集巻八に「旅の歌とてよみ侍りける」として載っている。千載集では第四句が「夢のなかに」とある。この世の

中は旅であり、夢である。だから旅をするのは、旅の人生の中でまた旅をするようなものであり、旅寝に見る夢は、夢の中でまた夢を見るがごときものである。つまり、人生は夢のようにほかないものであり、旅も夢のようにはかないものである、という意味の和歌である。宗長は、この歌をもって旅の詩人としての宗祇像を創り上げたかったのである。実生活の宗祇像がどうであれ、宗長はこの作品の中で宗祇を、連歌師として、また旅の詩人としての理想の姿に描くという創作意図を成し遂げたと思われる。

この後、宗長などの門弟は、師の遺骸を興に入れ、駿河の桃園の定輪寺に埋葬した後、駿河の国府に向かう途中、清見が関の月を見て宗長は次の歌を詠んでいる。

もろともに今夜清見が関ならばおもふに月も袖ぬらすらん  
この歌は、今夜、もし宗祇と一緒に清見が関にいたら、どれほどい  
いだろうかと思うと、悲しくて袖が濡れてしまう、あの月も多分悲  
しくて袖を濡らしているだろう、という意味である。師のいない空  
白がどれほど大きいかを知って涙を流している宗長の心境がよく現  
れている歌である。

国府に着いて、八月十五日には、駿河守護今川氏親主催の宗祇追  
悼連歌会が開かれる。この作品には、宗祇の前年の発句の中で使わ  
ずに残っている句を発句として、氏親の脇句、宗長の第三、合わせ  
て三句をあげている。

くもるなよたか名はたたじ秋の月 宗祇  
空とぶかりのかずしるきこゑ 氏親  
小萩原あさ露さむみ風過ぎて 宗長

宗祇の発句は、美しく晴れた秋の月を詠んだ句で、くもると悪い評

判が立つのはお前自身だから、どうかくもらないで名月のままでい  
てくれと願っている意味である。秋の美しい名月と晴れ渡った夜空  
を鮮やかに描いた句である。

宗祇が前年のその頃、駿河に帰る宗長に伴って越後を去るという  
話が出て、秋の名月の頃は、駿河の国に到着するであろうと思いな  
がら、この発句を作ったことを考えると、宗祇の心は旅のことで心  
をふくらませていた子供のような、くもりのない純朴で清いもので  
あったことがわかる。こういうくもりのない心を持った宗祇も、今  
はなき人になってしまったことを考えると、弟子宗長の心境も辛か  
ったと思う。せめて、宗祇の発句を以って連歌会を開くことによ  
って、師を追悼するしか術がなかったであろう。

氏親の脇句は、前句の晴れ渡った秋の夜空を鳴き渡る雁を描いて  
いる。雁の鳴き声によって空飛ぶ雁の数もよくわかる程であると表  
現して、前句によく付いている付け句である。前句の晴れ渡った夜  
空の視覚的表現に雁の鳴き声という聴覚的表現を付けることに依っ  
て、感覚の拡大化をねらっているわけで、なかなかの出来である。

宗長の第三は、前句の雁の鳴き声から古今和歌集の  
なき渡る雁の涙やおちつらむもの思ふやどの秋の上露

(秋上・二二一・読人しらす)

を思い出し、雁の涙が萩の露になるところを付け句に活用し  
たのである。萩原に露が降り、その露も寒そうに風が吹き渡ってい  
る荒涼たる風景を詠んだ句である。この連歌会のあった夜の氏親は  
「寄月恋旧人」という題で、次の歌を詠んでいる。

ともにみん月の今宵を残し置きてふる人となる秋をしぞ思ふ  
この歌は、生きていれば共に見るはずの名月の今宵をこの世に残

していまは故人になってしまった宗祇を思いながら悲しんでいる氏親の気持ちがよく現れている。

この後に、宗長と宗碩の追悼連歌が載っている。

きえしよの朝露わくる山路かな 宗長

名残過ぎうきやどの秋風 宗碩

宗長の句は、あなたのなくなった夜があけて、山路の朝露を分けずぎたことだという意味である。命のように散りやすい朝露を分けながら亡き人を思い、無常感に浸っている宗長の姿がよく現れている句である。身近かの人の死を通して人生無常を改めて考えさせられているのである。宗碩の句は、前句のなくなった人の宿を設定して付けた句で、あなたのなくなった宿の前をただ通りすぎるだけでも辛いのに、意地悪の冷たい秋風が吹いてますます辛いと詠んだ句である。

次には、宗祇のなくなった翌月の晦日に、宗長の草庵での連歌会で詠んだ宗長の句が載っている。

虫の音に夕露落ちる草葉かな

この句は、鳴きしきる虫の音に草葉に降りた夕露が落ちてしまったことだという意味である。秋虫のか弱い鳴き声の哀れさと、虫の鳴き声ほどのかすかな音によってははかなく散ってしまう露のはかなさと、ものさびしい秋の夕方の風景がよく調和されているすぐれた句である。宗長の実力を充分発揮した句である。

この句では、人生のはかなさを思う存分発揮している。この発句にかかわる逸話を次のように書いています。

此の発句を案じ侍し暁、夢中に宗祇に対談せしに、朝露わくると申発句つかうまつりて、又、夕露はいかゞとたづね侍りしか

ば、吟じて、何もくるしからざるよりありしも、哀れにぞ覚え侍る。

夢の中で、発句のことを宗祇に尋ねて、解答を求めている宗長の脳裏には、永遠の師としての宗祇像が刻み込まれていたのである。現実に戻ったら、もう自分を指導してくれる師はいないし、これからは自分自身が解決していくしかないことを思って、かなり精神的負担をも感じていたのであろう。

宗祇の臨終直前の夢のことと、宗長のこの夢の逸話は、この作品の文芸作品としての価値を高めるのにかなり効果的な構想であると言える。

ここで、一つ見逃せないのは、今まで上げた宗長の句、

小萩原あき露さむみ風過ぎて

きえしよの朝露わくる山路かな

虫の音に夕露落ちる草葉かな

には、三句とも「露」という言葉が入っているという事実である。「露」の持つはかないイメージと涙の象徴としての用法を考え合わせてみると、この「露」という表現が宗祇のなくなったあとの宗長の心境を代弁してくれるキーワードとなっていることがわかる。この次には、「寄道述懐」という素順の歌が載っている。

たちねの跡いかさまに分もみんをくれて遠き道の芝草

この歌は、素順自身の父である常縁の残した教えの道が、亡くなってから相当の時間が立って芝草に埋もれていて、どのようにたどったらいいかわからなくなっているという心境を詠んでいる。今までは、宗祇が常縁から伝授を受けていたから何でもわからないことがあれば教えてもらえたのに、宗祇の亡くなったのちは誰に教えても

らったらいのか、と戸惑っている素順の心境をよく現している。実際は「東野州に古今伝授受聞書並びに切紙等残る所なく、此のたびいまはのおりに、素順口伝付属ありし事なるべし。」と宗長が記録しているところから、臨終の時に宗祇から素順に口伝があったことがわかる。ここに、素順の歌と口伝事実をわざわざ宗長が書いた理由は何であろうか。今までの宗長の記述は、主に連歌師としての宗祇を追悼する立場であったが、ここに、素順の歌とそれまでの経緯を書くことに依って、古典学者としての宗祇像を強調したかったのではなからうか。

この後にもまた、素順と宗長の贈答歌が載っている。  
ながらへてありしこしぢの空ならばつてとや君も初雁の声 素順

返し

三歳へし越路のそらの初雁はなき世にしもぞつてと覚ゆる 宗長  
素順の歌は、生き延びて前のように越路におられたならば、越路から南に向かう初雁の声を聞いて、初雁に都への便りを託したはずなのにという意味で、今は故人になってしまつて初雁に便りを託す人もいなくなつた、と詠んでいるのである。初雁の声を聞きながら、寂しく立ち尽くしている作中人物の姿を想像するだけで、さびしさが伝わってくる歌である。古今伝授などのことで、宗祇と頻繁に手紙のやりとりをしていた素順にとって、手紙のつてとしての雁の声は哀切に聞こえたに違いない。宗長の返歌は、三年にわたつて宗祇が住んでいた越路の空の初雁は、あの世に渡つて宗祇に便りを伝えてくれる「つて」だろうと思ひやつて詠んだ歌である。宗長が宗祇に伝えてほしい便りは、連歌の付け合のことなどの疑問を師に尋ねる内容である。素順の歌からは、機会がある度に古典を伝授しよう

とする親切な古典学者としての宗祇像を見出すことができるし、宗長の歌からは、連歌師としての宗祇のいない空白を埋める術がないことを強調しているところから、連歌師としての宗祇の占めていた位置を確認することができる。

最後には、当時、白河の関近くの岩城に庵を結んでいた兼載が風のつてに宗祇の死を聞き、せめて終焉の地だけでも尋ねたいと、はるばる湯本まで来て送つた追悼の長歌と宗長の返歌が載っている。

末の露 もとの雫の ことよりはは 大かたのよの

ためしにて ちかき別れの かなしびは 身に限るかと

おもほゆる なれし初めの とし月は みそぢ余りに

なりにけん 其いにしへの ころざし おほはら山に

やく炭の 煙にそひて のぼるとも 惜しまれぬべき

いのちかは 同じあづまの 旅ながら さかひ遙かに

へだつとも たよりの風に ありありと つげの枕の

よるの夢 驚きあへず 思ひたち 野山をしのぎ

露さえし 跡をだにとて たづねつゝ ことゝふ山は

松風の 答へぬばかりぞ かひなかりける

返歌

おくれぬと歎くもはかないく世しも嵐のあとの露の憂身を  
兼載の長歌は、全体的に命のはかなさ、身近な人との死別の悲歎、  
故人との長い交際の懐古、宗祇死亡のうわさを接しての悲哀など詠  
んでいる。一篇の悲しい物語を語っている歌である。宗祇に続いて、  
北野連歌所奉行になって、新撰菟玖波集の成立に協力していた兼載  
だけに、宗祇の死に接して受けたショックは大きかつたはずである。  
歌の表現の中で「露」「雫」「煙」「夢」などの、はかなさを代表

する言葉を駆使することによって、最大の哀悼を現している。

宗長の返歌は、人生は風のあとと露のごとく散ってしまふものだから、死に後れたと云って歎くこと自体がはなかないことであると詠んでゐる。

宗長は、命のはかなさを強調したこの哀悼歌を以って『宗祇終焉記』をしめくくことに依り、悲しみの余韻を響かせようとした。そこに、この作品の構成のうまさをおうかがうことができる。

今まで、『宗祇終焉記』に載っている歌や句を順序に従って分析してみた。宗祇の越後下向と宗長の訪問、宗祇終焉、追悼の順に、それらの内容にふさわしい歌や句がうまくちりばめられているわけであるが、作者の宗長の意識の中には、所々の印象に残った歌や句が残っており、これらと関連のある逸話や地の文の中で記録したのではないかと思われる。いわゆる歌物語的構想をこの作品の中に適用していると言える。特に、地の文の中の日時のずれや、他の紀行文学と違って旅行での感想などがほとんど書かれていない事実から推し測ってみると、宗長は、ただ宗祇の終焉を記録するだけにとどまらず、旅の詩人としての宗祇像を描こうとする創作意図をもつてこの作品を書いたのである。

五

『宗祇終焉記』の中に描かれた宗祇像は、連歌師としての理想そのものであった。旅に立つ時に「帰る山の名をだに思」わない旅の詩人としての宗祇像と、臨終を迎える瞬間まで付句のことを思う連歌師にふさわしい宗祇像を描くことに依って、日本文学史の中での旅の詩人としての西行・宗祇・芭蕉の系譜を作り上げるのに一助に

なった作品である。

また、八十歳を越えた老軀であるにもかかわらず、老人とは思えないほど、元氣な活躍振りを見せる宗祇像を描くことに依って、病弱であった作者宗長の理想像を摸し求めている作品でもある。

この作品の成立事情を、宗長は「自然齋此度道中死去、彼御知音の方へいかなど尋給ふべく候哉、披見のために注付侍り」と書いているが、本当の創作意図は、旅の詩人、古典学者としての宗祇像を描くことに依って、連歌師の理想像を創り上げるところにあったと言える。

構想の段階では、自分の記憶に残った和歌・発句・付句などを順序よく配置しておいて、それと関連のある逸話などを記録していく方法をとっている。この作品が旅の記録を残しているところから紀行文学として取扱う場合が多い。しかし、旅路での感想・見聞・歌枕探訪などの記述がほとんどない。そういう意味では、紀行文学としての価値よりは一種の物語的要素の強い作品である。

つまり、この作品は、宗祇の最晩年の要素を伝える伝記資料としての価値と、連歌師としての理想の宗祇像を創り上げたすぐれた文芸作品としての価値とを認めることが出来る。

〔注〕

(1) 金子金治郎「宗祇旅の記私注」 桜楓社 一九七六年。

本稿における「宗祇終焉記」の本文はこれに依る。

(2) 両角倉一「宗祇連歌の研究」 勉誠社 一九八五年。

「付録 宗祇略年譜」に依ると、宗祇は七回にわたって越後に下向していったことがわかる。

一回目 文明十年（一四七八） 五八歳

三月越後下向、文明十一年の九月帰京

二回目 文明十五年（一四八三） 六三歳

四月頃（一説越後下向？）、文明十六年の九月帰京

三回目 長享二年（一四八八） 六八歳

五月越後下向、同年九月帰京

四回目 延徳三年（一四九一） 七一歳

五月越後下向、同年十月帰京

五回目 明応二年（一四九三） 七三歳

閏四月越後下向、明応三年三月帰京

六回目 明応六年（一四九七） 七七歳

五月越後下向、同年九月帰京

七回目 明応九年（一五〇〇） 八十歳

七月越後下向、文龜二年七月帰京途中死亡

(3) 『宗祇終焉記』の卷末に、

自然齋此度道中死去、彼御知音の方々いかゞなど尋給

ふべく候哉、披見のために注付侍り 宗長

水本与五郎殿

とある。内閣本には、

此一巻は水本与五郎上洛の時、自然齋知音の今京都にてい

かにととはる、返しのために書写者也一咲”

とある。

(4) 前掲書 一〇五頁

(5) 前掲書 一〇五頁

(6) 安田章生『西行と定家』 講談社 一九七五年 五六頁

(7) 両角倉一『宗祇終焉記』『研究資料日本古典文学① 連歌・

俳諧・狂歌』 明治書院 三四頁

(筑波大学外国人研究者、韓国外国語大学副教授)

(付記)

本稿は、日韓文化交流基金研究助成金の援助に依ったものである。